

出題のねらい

㊦現代文は、論説的文章です。池上嘉彦『記号論への招待』から出題しました。「記号論」という学術分野における「記号」が、私たちの一般に連想する「記号」とどのように違うのかを説明した文章です。各段落の役割を適切に把握する力、また、段落の内容を語句に即して正確に理解する力を中心に問いました。本文を文脈に沿って丁寧に読み解いているか、問題に即した解答となっているかどうかによって、得点に大きな差が出ます。

㊧古文は、平安朝を代表する日記文学作品の一つである『更級日記』から出題しました。どこからともなく現れた猫をめぐる日々の出来事を叙述した文章の中で、作者の折々の心情が語られていきます。設問は、基本的な文法事項、語彙力、文脈の読み取りに関する問題、そして文学史です。文章は比較的平易で、難解な語句も見当たりません。古文の知識に基づいて、文章構造を把握した上で、正確な解釈へとつなげることが出来ているかどうかを確認することに主眼をおいた問題構成になっています。



【解答】(50点)

問一	a 選択肢	b 了承	c 既成	
	d 知見	e 素性		(各2点×5)
問二	A エ	B ウ	C オ	
	D ア	E イ		(各2点×5)
問三	I イ	II オ	III エ	(各3点×3)
問四	言語創造(4字)			(3点)
問五	(これらは)あるものに(ある意味を付したり、あるものからある意味を読みとった)りする行為(だから)(36字)			(3点)
問六	現代の記号論が関心を寄せる「記号」には、慣習としてすでに出来上がっている「符号」のような固定性がなく、「記号」ということばの適用にためらいを感じるから。(76字)			(6点)
問七	イ			(3点)
問八	ウ			(3点)
問九	エ			(3点)

【解説】

問一 漢字の知識を測る問題です。bを除き、正答率はかなり低かったです。aは「肢」が書けない、cは「既」を「規」、「成」を「製」「正」とする、dは「地検」「知験」、eは「性」を「情」「状」とする誤答が多く見られました。

問二 論理的文章にしばしば出題される、空欄に接続詞を補う問題で、思考力と判断力が求められます。前後の文脈がどのような関係にあるか、その関係を繋ぐにはどの接続詞がふさわしいか、この2つをよく考える必要があります。誤答として、Aをオとする例、BとCが逆になった例が多かったです。

問三 文脈に相応しい語句を選択する問題です。本文の論理を正確に読み解く思考力・判断力が問われます。誤答が最も多かったのはIでした。空欄の直前に「の間に」とあるため、「何かと何かの間」であるはずですが、誤答で多かったオ「日常の世界」では、論理的な文が成立しません。「詩」について言及されているからといって、カ「表現と比喩」を選ぶのも誤りです。空欄の後に「既成の語形と語義の間」とあるように、段落の主旨は、これらの関係を説明することにあります。IIはア、IIIはウとする誤答が目立ちました。

問四 空欄補充の問題です。段落と段落の関係を正確に把握する思考力、文脈に最もふさわしいキーワードを選び出す判断力が求められます。空欄の段落では、2つ前の段落で述べられた「朝の小鳥」や「一枚の葉」に意味を付したり、意味を読み取ったりする人間の行為について説明しています。2つ前の段落に「新しい『記号』をせせせと創り出している」とあるのを、この段落で「言語創造」と言い換えているのに気付く必要があります。誤答には、「意味づけ」「意味あり」「原型と本質」「記号現象」等がありました。

問五 抜き出し問題です。本文の流れを正確に読み解く思考力・判断力を測ります。傍線部の段落では、2つ後の段落で説明される「言語創造」の分かりやすい具体例として、「朝の小鳥」や「一枚の葉」を挙げています。「具体例→説明」という段落の展開を読み解けば、おのずと正答に行き着くでしょう。誤答は、傍線部の直前の段落「それは一つの創造的な営み——神学的な意味とは別の意味での『言語創造』の営み」を抜き出す例が多く見られました。この部分は、あるものに意味を付したり、意味を読み取ったりする人間の行為を「比喩的に」述べた箇所ですから、適切ではありません。

問六 記述式問題です。文脈を正確にたどり、適切な文章にまとめる思考力・判断力が求められます。設問の要求は、「記号現象」という用語が「記号」という語の代わりに使われる理由を述べることです。その理由について、傍線部の後に「そのような点を顧慮してのこと」とあるので、「そのような点」を明らかにする必

要があります。「そのような点」とは、傍線部の直前の段落に説明される事柄を指すので、この段落を要約すればよいのです。要約に「現代の記号論」という語句を用いなければ、「記号現象」と「記号」との対比が不明瞭になるため、解答として不十分です。誤答で多かったのは、傍線部の後「あるものにある意味を付したり……そこには『記号現象』が生じている」を抜き出した例です。この部分は、直前に「このように考える場合」とあるように、「記号現象」と「記号」の区別を前提に、さらに議論を進めた箇所ですから、不適切です。

「言語創造」が「人間の文化の原型と本質」だとしていますが、本文は、「言語創造」の「原型と本質」を探るのが現代の記号論の関心である、と述べています。

問七 本文の論理展開を正確に理解し、ふさわしい選択肢を選び出す、思考力・判断力を測る問題です。段落をよく読み、論理の流れに注目しましょう。まずは、傍線部「そのように」が何を指すのかを明らかにしなければなりません。それは、人間の「意味づけ」の営みが、日常レベルでは「ことば」の使用によって支えられている、ということです。本文のそれまでの議論で、人間は慣習化、固定化した「符号」をあやつる以外に、「意味づけ」によって絶えず新しい「記号」を創造している、と述べられてきました。つまり、「ことば」には、慣習に従う惰性的な側面と、慣習にとらわれない柔軟で創造的な側面の2つがあるということです。日常の「ことば」は慣習に従うので、一般の人は「ことば」の創造的な側面に気付きません。このため、「意味づけ」という創造的な営みが惰性的な「ことば」に支えられているとは「考え難い」のです。エとする誤答が目立ちました。

問八 段落の議論を正確に読み解き、ふさわしい選択肢を選び出す思考力・判断力を測る問題です。要点は、「命名」という「意味づけ」は自分の身近な対象だけでなく、それ以外に対しても可能である、ということです。自分が意味ありと認められさえすれば、身近なものでも、よく分からないものでも、あらゆるものに「命名」できるのです。誤答は、エが最も多かったです。どうしてよく分からないものに「命名」できるのか、という問いに対して「意味があるから」と答えれば、なぜよく分からないものに意味があるのか、と問い返されるでしょう。結局、正答のように「人間が意味ありと認めたから」と説明しなければなりません。

問九 本文の論理と表現を正確に読み取る思考力・判断力を測る問題です。選択肢に使われている語句と語句の関係を吟味し、本文の論理・表現に本当に合致しているかどうか、慎重に判断する必要があります。アは「打破」、イは「重んじている」が、本文の論理・表現と異なります。最も多かった誤答はウです。ウは



【現代語訳】

三月の月末ごろ、土忌みのため、ある人の家に移ったところ、桜が満開で趣深く、春も終りというのにまだ散らない木々もある。帰ってきてその翌日、あかざりし……（我が家の桜は心残りのまま散ってしまいましたが、その桜に思いがけなくあなたのお宅で、それも春の終りの散る寸前に、ひと目お目にかかったことで）

と、使いに持たせて言い送った。

毎年、桜の咲き散る折ごとに、乳母の亡くなった季節だなあと、そればかりが思い出されて心が傷むのだが、そうした折柄、同じころ亡くなられた侍従の大納言の姫君の御手跡を取り出して眺めながら、何とはなしに物悲しくなっていた。と、それは五月ごろのことだったが、夜の更けるまで物語を読んで起きていると、どこからやって来たのか見当もつかないが、猫がまことにのどやかに鳴いている。はっとして、よく見るといかにもかわいげな猫がそこにいる。どなたのもとから迷ってきた猫だろうと見ていると、姉が、「ああ静かに。人に聞かせてはなりません。たいそうかわいい猫だこと。私たちが飼いましょう」と言うので、飼ってみると、非常に人馴れて、私のそばにやって来て、寄り添って寝るのだった。捜している飼主がありはすまいかと、隠して飼っていると、この猫は召使いのところになぞ全然寄りつかず、じっと私たちのそばにばかりいて、食物も汚らしいものには顔をそむけて食べない。私たち姉妹の間にびったりまつわりついているので、私たちもそれをおもしろがりかわいがっていたが、そのうち姉が病気になる、何かと家の中が取り込んでいたので、この猫を北面の部屋にばかり置いて、呼んでやらないでいると、やかましく鳴き騒ぐ。けれども、やはり何かわけがあって鳴くのだろうと気にもとめないでいると、病気の姉がふと目をさまして、「どうしたの猫は。こちらへ連れていらっしやい」と言うので、「どうして」と聞くと、「いま夢にあの猫が現れて、『私は侍従の大納言の姫君で、かりにこういう姿になっているのです。こうなるべき因縁が少々あって、こちらの中の君が私のことをしきりに、いとおしんで思い出してくださるので、ほんのしばらくと思ってここにいるのですが、このごろ召使いの間にいて、ほんとうに寂しくて』と言って、ひどく泣く様子が、いかにも高貴な美しい人のように見えて、はっと目をさましたところ、この猫の声だったのがとても悲しかったのです」とお話しになる。私は姉の話の聞くと、ひどく胸をうたれた。それからというもの、私たちはこの猫を北面にも出さず、たいせつにお世話した。私が一人ぼっちでいるところにこの猫が向い合っていたので、なでながら、「侍従の大納言の姫君がおいでなのね。お父上の大納言殿にお知らせしたいわ」と話しかけると、私の顔をじっと見つめて穏やかに鳴くのも、気のせいか、

一見したところ普通の猫ではなく、私の言葉を聞き分けているようで、しみじみといとおしい。

【解答】(50点)

問一	[記号] C	[品詞] (終) 助詞	(各2点×2)
問二	A 変格 B 連用 C 命令		
	D こ		(各2点×4)
問三	① イ ③ エ ⑧ ア		(各3点×3)
問四	ウ		(4点)
問五	エ		(4点)
問六	オ		(4点)
問七	侍従の大納言の御むすめの手を見つつ		(4点)
問八	④姉が病気になることがあって ⑨大納言殿にお知らせ申しあげたいことだ		(各5点×2)
問九	イ		(3点)

【解説】

問一 打ち消しの助動詞「ず」と終助詞「な」の識別を問う文法問題です。c「な」以外は、すべて動詞の未然形に接続しています。助動詞の学習の中でも、初期に学ぶものですので、識別は容易だったようです。cの品詞名についても、文末の一音節語彙ですので、ほぼ正解でした。

問二 カ行変格活用動詞である「来」の活用形を問う文法問題です。i、iiは、いずれも完了の助動詞「つ」ivは接続助詞「て」が下接していることから、連用形が正解です。全体的によく出来ていましたが、連体形とする誤答も見受けられました。iiiのみが、文末表現となっており、文脈から命令形と見分けられるかどうか問われています。「北面にのみあらせて呼ばねば」としていた猫が、姉妹の会話の後には「その後はこの猫を北面にも出さず」とあるのがヒントになります。会話によって猫の処遇が変わっているのは、「ここに連れてきて欲しい」と願う姉の言葉がきっかけだったのです。設問箇所が文末であるため、終止形とする誤答が多かったようです。このように、文法を知識の問題としてだけでなく、読解の一環としてとらえた学習も進めておいてください。

問三 古文を読み解く上で、基礎的な語彙の意味を問いました。多義語の解釈は、どのような文脈や条件の下で、それぞれの微妙な意味の差を読み取ることが出来るかにかかっています。文法同様に知識の問題としてとらえるのではなく、解釈のための学習を心がけてください。①「おどろきて」は、知識

一般入試／国語(前期)

としてはアとイが主として使用される意味用法と学習しているはずですが。文脈的には、確定条件法の句「夜ふくるまで物語をよみて起きあたられば」を受けての動詞であることを加味して解釈すれば、ここでの意味は理解可能なです。正答率が低くアとした誤答が多かったのは、知識のみで答えた結果でしょうか。③は、上接する「をかし」が、明朗さを伴いつつ情趣を感じる形容詞であることから、ここでの「らうたし」の意味用法を類推します。⑧は夢に現れた猫の語り全体を読み解くことが要求されています。

問四 猫が現れた場面が続く叙述、「いみじう人なれつつ」、「尋ぬる人やある」がヒントになります。自分達にすぐに懐いてしまった猫を手放すことの惜しさにとった行動であることが読み取れます。アは、登場人物に両親の記述はなく、イ、エは猫に関する説明記述中には見られない事項です。

問五 古文特有の文法基本事項である係り結びの法則を理解しているかどうかを問いました。傍線部⑤に係助詞の「こそ」が含まれていること、直後が引用の「と」になっていること、この二点から、ここは、結びの文末表現が省略されていると気がついて欲しいところです。係助詞「こそ」の結びは已然形となりますので、推量の助動詞「む」の已然形を含むエが正答となります。

問六 古文常識の確認に文脈理解を交えた問題です。姉妹の生まれ順を表す呼称は、長女が大君、次女が中の君、以下、三の君、四の君と続くのが一般的です。この文章での登場人物では「姉なる人」と主人公とが姉妹の関係であることがわかります。ここでは、姉の夢の中に現れた猫が、自分の前生での身の上を明かす語りをする中で、主人公への呼称として用いていることとなります。やや複雑な読み解きが必要だったためか、正答率は二割程度でした。登場人物の人間関係の把握と整理は、古文読解の基礎です。敬語の理解にも繋がる重要な作業であることを心得て、学習を進めてください。

問七 前問との関連で、文全体の構造把握と文脈理解が出来ているかどうかを確認する問題です。傍線部⑦の直前にある「すずろにあはれ」が思い出している情景のヒントになります。正答に該当する部分が、複数動作の並行を意味する接続助詞の「つつ」で結んでいることから、思い起こされている情景への理解へと進むことで解答が可能になります。しかし、問六で、この部分が姉の夢の中に現れた

猫の昔語りであることに気がつかなかった場合は、この設問も理解が届かなかったようで、ほぼ同じ正答率となりました。

問八 口語訳の問題です。④では、古文での「なやむ」の語義が精神的な苦しみだけではなく「病気で苦しむ」と理解されていることを確認しました。次の行に「わづらふ姉」とあることもヒントになります。⑨では、大納言殿に対する敬語表現の理解と、文末表現が自己の願望を表す助詞である「ばや」となっていることを口語訳に反映できているかを確認しました。

問九 文学史の問題です。『更級日記』の作者である菅原孝標女は、歌人としても著名で多くの勅撰和歌集にも入集作を残しています。アの藤原道綱母は、『蜻蛉日記』の作者として知られ、作者とは伯母と姪の関係になります。誤答例としてアが目立ったのは、この取り違えが原因かも知れません。いずれも平安朝を代表する日記文学作品ですが、文学史の学習では、同ジャンル内での作品の前後関係を整理しておきましょう。